

漢文

漢文入門 漢文に親しむ

訓読の基本 (2) 「格言」



講師 渡辺恭子

学習のねらい

漢文は、楽しく、味わいのある話が多いのですが、昔の中国語で書かれたので、「訓読法」(漢文のきまり)を知らなければ、読むこともできません。そこで、はじめに、読み方のルールである「訓読の基本」を二回に分けて学びます。今回は、その二回目です。「返読文字」・「置き字」・「再読文字」とは何かを知り、その用法について学びましょう。

● 学習のポイント ●

- 〈一〉 「返読文字」について
- 〈二〉 「置き字」について
- 〈三〉 「再読文字」について

■ 「返読文字」について

漢文を読む場合は、目的語や補語に「ヲ・ニ・ト・ヨリ」などの格助詞を送り仮名として付けて、述語に返って読むことを、前回学びました。ところが、漢文の中には、「ヲ・ニ・ト・ヨリ」がなくても、下に置かれている語から返って読む文字があります。それを「返読文字」といいます。何度も出てきますので、その度に覚えましょう。次の赤字が「返読文字」です。

少年 易 老 学 難 成。

(少年 老い 易く 学成り 難し。)

李 下 不 正 冠。

(李下 冠を正さず。)

他 山 之 石、可 以 攻 玉。

(他山の石、以つて玉を攻くべし。)

江戸時代の寺子屋では、漢文を教えるときに、「鬼と会ったら帰れ。」と教えたそうです。これは、文中で、「ヲ・ニ・ト」といふ送り仮名が出てきたら、ひっくり返って読むのですよ、ということ覚えやすいように言った言葉です。

■「置き字」について

漢文に使われている漢字は、それぞれ一回ずつ読むのが原則ですが、その原則から外れるものが二つあります。その一つが「置き字」で、もう一つが学習のポイント〈三〉の「再読文字」です。「置き字」とは、読まない漢字のことをいいます。直接は読みませんが意味はありますので、前後の文字の送り仮名に、それぞれの「置き字」の持つ意味(役割)を含ませて読みます。「書き下し文」に改める時、「置き字」は書きません。

次の赤字が「置き字」です。

過^{チテ}而^{ザル}不^メ改^{コレヲ}、是^{イフ}謂^{チト}過^{チト}矣。

(過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ。)

忠^ハ言^{ラフドモ}逆^カ於^ニ耳^ニ而^{アリ}利^ニ於^ニ行^{ヒニ}。

(忠言は耳に逆らへども、行ひに利あり。)

母^{ナカレ}下^{シテ}以^{モツテ}己^{オホレ}之^ノ長^ヲ而^{アハ}形^{スコト}人^ノ之^ヲ短^ク。

(己の長を以つてして人の短を形すること母かれ。)

■「再読文字」について

訓読する時に、「一」の漢字を二度読む文字のことを「再読文字」といいます。読み方は、最初に返り点に関係なく、日本語の副詞的な読みをし、さらにもう一度、今度は返り点に従って助動詞的(動詞もある)な読みをします。「書き下し文」に改める時は、一度目はそのまま漢字を用い、二度目の読みは平仮名にするのが決まりです。

次の赤字が「再読文字」です。

未^{いま}来^{きたら}。

(未だ来たらず。)

未^{いま}聞^き二^カ好^ム学^ヲ者^{ナリ}也^{ナリ}。

(未だ学を好む者を聞かざるなり。)

將^{まさ}限^り其^{その}食^を。
す

(將に其の食を限らんとす。)

及^{およ}時^に當^ま勉^め勵^ん歳^を月^を不^ま待^た人^ず。
ス

(時に及んで當に勉勵すべし、歲月は人を待たず。)

君^{きみ}自^{より}故^{ふる}郷^{さと}來^り、應^ま知^ら故^{ふる}郷^{さと}事^を。
タ

(君故郷より來たる、應に故郷の事を知るべし。)

過^か猶^も不^ま及^た也^ず。
キ

(過ぎたるは猶ほ及ばざるがごときなり。)

【再読文字】

漢字	読み方	意味
未	いまだ〜ず	否定(まだ〜しない)
且	また〜(セン)トす	未来(今にも〜しきうたす) 〜にならうとす(る)
將	また〜ベシ	当然(当然〜すべきである)
當	また〜ベシ	推量(恐らく〜である)
心	また〜ベシ	比較・同等
猶(由)	な未〜(フ・ガ)トシ	(ち)きうたす(る)のち(だ) (る)あ(る)と同等である(る)